

## 竹岡判決を読んで

阿部 良

わたしはかつて、倶楽部の会報に「赤羽がある幸せ」という題でエッセイを連載したことがあります。ゴルフにまつわるさまざまな本を紹介しながら、赤羽でプレーすることの喜びや、メンバーとつきあう楽しみを綴ったものでした。

その際わたしは、赤羽の特徴を標語風に表現できないかと、ない知恵を絞ったことを懐かしく思い出します。「遠くの名門より近くの赤羽」とか、「フラット・フラット・フラッド」とか。コースが平坦なら人間関係もフラット（上下の隔てがない）。フラットだから手引きカートで環境にも優しい。ただし、フラッド（大水）に弱いのが玉に傷。「フラット」にはこんな意味を込めました。

振り返って見れば、能天気すぎたかと恥ずかしくなりますが、「フラット」こそ赤羽の原点であり存在意義だという考えは変わりません。

そのようなわたしにとって、現役理事の除名という事件は、あまりに唐突で不可解な出来事でした。親しい間柄で交わされたショートメールの片言隻句をとらえて、「倶楽部の秩序を乱す」というのは大げさすぎる気がしましたし、本人に事情を聞かず、弁明の機会を与えることもなく、たった一度の議論で除名を即決したのは、いかにも拙速であり、常識を欠いていると思われたのです。

案の定、地位保全の仮処分命令の申し立てが認められ、その後の裁判で除名処分は無効との判決が確定しました。除名に相当するような事件ではなかったのです。

仮執行の申し立てが認められた時点で、理事会が処分を撤回し、謝罪をしていれば、今日にまで尾をひく争いは回避できたと思われれます。わたしは経営の幹部にその旨を手紙で伝えたことがありますが、会社も理事会も対決の姿勢を崩すことはありませんでした。その結果が、会員から起こされた3件の訴訟で、会社・理事会がことごとく敗れるという不面目につながったのです。

どうして常識が働かなかったのでしょうか。わたしは絶えず自分に問うてきました。竹岡裁判の判決文を読んで、事情の一端がうかがえるような気がしました。

研修会のトップが機関決定を経ずに積立金を取り崩し、30万円もの金を寄付したのは誰の要請によるものか。研修会の一員が会社への寄付を余儀なくされるに至ったのは誰の意向によるものか。ショートメールを問題化し、研修会からの除名に向けた調整をしていたのは誰なのか。事情を知らない理事会に報告書を送り、倶楽部からの除名を強く働きかけたのは誰なのか。処分に疑問を発した研修会員を排除するために、研修会の休会・再発足という工作を主導したのは誰なのか。判決を読めばこの誰かが同一人物に収斂することがわかります。

一連の出来事は、「赤羽中興の祖」と称される有能な経営者が、有能すぎるがゆえに権力の集中を招き「独善の罫」に陥った悲劇だったとわたしは想像します。いかに優れた組織や制度も、常に新陳代謝を心がけなければ、やがて錆が生じ柔軟性が失われてしまいます。

新陳代謝を促す原動力となることこそ、取締役会、理事会のみなさまに期待されていることではないでしょうか。大いなる議論を待ちたいと思います。